

人はなぜ「働く」のか

兵庫県・西宮市立西宮高等学校 1年 本田 喜美華

「今いる家は自分の家じゃない、親の家なんだ。」

私のクラスの担任の先生は口癖のように終礼でこのことを言う。始めの頃は、そんなこと当然だと思っていたが、何度も聞くうちに「先生はこの言葉で、私達生徒に何か人生における大切なことを伝えようとしているんじゃないか。」

と思い、先生がその言葉を繰り返す意味について考えるようになった。

今年の4月に高校生になった私は、学校には慣れてきたものの、その生活は正直中学生の頃とほとんど変わっていない気がする。変わったのは周りの友達、環境、勉強をする量が増えたということぐらいだ。何か新しいことが始まったというわけでもない。しかし、他校の友達には高校に入学してアルバイトを始めたという人が大勢いた。それを聞いた時は少し驚いた。私の場合、学校で禁止されているからという理由ももちろんあるが、そもそもこの年で社会に出て働くという発想が全くなかった。アルバイトをしている友達になぜアルバイトをするのか聞いてみたところ、「親に頼らないで遊びたい」「欲しいものがあるから」「社会経験になると思って」など理由は人それぞれだった。また、アルバイトをしていない友達に高校生のアルバイトについてどう思うか聞いてみたところ、「社会の勉強になっていいと思う」という話も出たが、「いいとは思うけど、今は違うことをするべきだと思う。」という意見が出た。私もどちらかというところ後者の意見に賛成だった。だが、高校生からアルバイトをする人を尊敬する気持ちもある。自分の知らない未知の世界に一步早く踏み出していて、その人達が遠い世界にいるような気がするからというのもあるが、やはり社会に出て、親に頼らず自立しようとしているところが一番尊敬できる。

そして最後に私は、自分の両親に高校生のアルバイトについてどう思うか聞いてみた。すると、

「今は無理に働かなくても、アルバイトは将来いくらでもできるやん。だから、それよりも今しかできないことをした方が絶対良い。」

と答えた。私はこの言葉を聞いて気付いたことがあった。今の自分の生活があるのは全て両親が毎日働いてくれているからだということだ。働いて生活をやりくりすることは世間的に見れば当たり前のことのようにだが、実際に社会に出ることを目前に控えた高校生の私は、まだ「働く」ということがどんなことなのか想像できない。あと数年後に自立して働くと考えたら、生きていける自信もなくて怖くて仕方がない。だからこそ、これから自立していくために、働くことについてきちんと向き合おうと決意した。

何のために自分はこれから働いていくのか、と聞かれたら、少し戸惑ってしまう。お金を稼ぐため、生活するために働くということは当然あるだろうが、それだけだと人生の半分以上がお金に縛られているようだ。また、お金のためだけに働くと、何のために生きているのか分からなくなると思う。たとえお金をたくさん持っている大富豪の人でも、仕事はしっかりこなしている。それならば、なぜ人は働くのだろうか。その理由を見つけたきっかけは、ある旅行先での出来事だった。

今年の夏、私は家族と東京ディズニーランドに行った。私がそこに行ったのは今回で10回目だった。友達からは、

「そろそろ飽きるんじゃない？」

と言われるが、もちろん飽きることはない。その理由は単にアトラクションやショーが楽しいということもあるが、一番の理由は他の場所にはないある特徴だ。それは、キャストの仕事っぷりだ。暑い中、朝早くから夜遅い開演時間までキャストはずっと笑顔で私達ゲストを迎えてくれる。しかも、パーク内のキャストだけでなく、駐車場の誘導員でさえも明るい笑顔でいる。私は、ディズニーランドに行って笑顔で働いていないキャストは一度も見たことがない。また、目につかないようなところまで綺麗きれいに掃除しているキャストもいる。どんなに頑張っても時給は変わらないのに、なぜそこまで熱心に働けるのだろうか。そんなことを考えていた時、ある本で一人のキャストの話を目にした。私と同じ疑問をキャストが問われた時、そのキャストは

「僕達はエンターテイナーだからね。ゲストに喜んでもらうことが、最高の報酬

だからさ。」

と答えた。何のために仕事をしているんだろうという疑問が、この言葉を聞いた途端解決した。人に喜んでもらえることこそが自分の働く意味なんじゃないかなと思った。一生懸命働いていたとしても、常に誰かに気付いてもらえるわけではないが、何だか気持ちが良い、自分自身が幸せな気持ちになる。また、自分が熱心に働くと、見ている方も清々^{すがすが}しい。その充実感を得るために仕事があるのだと思う。大人が楽な道よりも厳しい道を選ぶのは、自分が働くことによって、誰かの役に立ち、家で待つ家族も共に幸せにできるから。懸命に働くことによって、やっと自分が必要とされていると気付くんだと思う。

しかし、決して全ての人が自分の思い描いていた通りの職に就けるわけではなく、また理想通りの職に就けたとしても、その仕事にはやりたくないこともたくさん含まれる。

実際に私は、中学二年生の時、「トライやる・ウィーク」という職業体験で希望していた通り飲食店で体験することができた。だが、その仕事は想像していた接客などとは程遠い、店のエントランスで売っている商品の袋とじや、サンドイッチを入れるフードパックのシールを貼る作業、店内の掃除など地味なことばかりだった。体験一日目から二日目は正直、「仕事ってそんなに楽しくないんだな。」

とってしまっていたが、掃除をしているとたくさんのお客さんが「がんばれ」と声をかけて下さったおかげで働くことの楽しさを感じられた。いざ社会に出て仕事を体験したら、つらいことや、しんどいこと、やりたくないことがたくさんあった。しかし、やりたくないことも、何かをきっかけに好きになってしまえば、最初はやりたくなかったことも次第に楽しくなる。思い通りの仕事ができるに越したことはないだろうけど、ほとんどの場合は、仕事をするようになって初めてその仕事の楽しさに気が付くのだろうなど、この職業体験を通じて学んだ。

「今いる家は自分の家じゃない。」

この言葉に意味があるとしたら、今の私には「自立をしろ」か「親にもっと感謝しろ」としか考えられない。しかし、これから大人になっていけば、この言葉の意味がはっきりと分かると思う。人が「働く」のは人を幸せにするため。

自分がいざ働き始めたら、働くことで誰かに笑顔になってもらいたい。たとえ人目につかないところでも一生懸命働きたい。そしていつか、今まで育ててもらった親に恩返しをしたい。

〈参考文献〉

- ・ 鎌田 洋『ディズニー おもてなしの神様が教えてくれたこと』 SBクリエイティブ
2014年3月

